
カブトムシ

浅葉りな

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

カブトムシ

【コード】

N2839C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

カブトムシを飼う、昆虫好きの女の子の話。

母の呼ぶ声が聞こえたから、私は飼いはじめてから2年目になるメスのカブトムシを水槽へ戻した。

ヘアバンドで上げていた前髪を下ろしながら、重い足取りでリビングへ入る。母はすっかり身支度を整えて待っている。責めるような視線を感じながら、私は用意されていたよそゆきの服に着替えた。

なにもたかが買い物で、着替えることなどないと思う。けれども母はそういったことにこだわるたちで、私は逆らいようがない。もう反論する気も起きなくなつて、私は母の言うなりになっている。

「なにか欲しい服とか、ある？」
微笑を浮かべながら母が言う。

特に欲しいものなどなかったけれど、ここでいららないなど言うては大変なことになる。

「まだよくわからないから、見てから決める」

そう無難に返事しておいた。

母は嬉しそうに目を細めると、先に立って家を出る。

車に乗り込んで待つ母を見、私は内心ため息をついた。今日はどうやら、わざわざ遠くまで行きたいらしい。服なんて近くで買えばいいのに。毎度のこととはいえ、うんざりしてしまう。

でもそれを口にしたら、殺される寸前のニワトリよりもけたたましく騒がれるんだろうな、と（そんなニワトリを見たこともないのに）思うから黙っておく。

「新しいスプリングコートなんかもいいんじゃない？」

運転席に乗り込んで、シートベルトを締めながら母が言う。

コートなんて去年のがまだあるし、冬用も含めれば着もあるんだから、これ以上買う必要はない、と思う。でもそんなこと言えるわけもなく、「どうしようかな」と私は答えておいた。

母はそうして、嬉しそうに、一方的に話を続けながら車を走らせる。私は適当に相槌を打ちながら、きつと相槌を打つは私じゃない誰かでも、娘っていうものであるのだったらかまわないのだろうか、などと思った。

やがて店に着いて、母は私を先に降ろした。中で先に見ている、ということらしい。

母はそのまま、駐車場へと行ってしまふ。私は気が進まなかったけれど、店舗の中へ入る。

店内はむわつと暑くて、私は思わず顔をしかめた。

こういうところは人も多いし、なにより、あまり服に興味のない私にとってはさほど楽しい場所ではない。

でも、母はなぜか「女の子は服を買いに行くと思ふ」と思い込んでいるらしく、よく私をこういう場所に来て来ようとする。私にしてみれば、放っておいて欲しいなあ、と思ったりするのだけでも、そんなことはわかってもらえない。

母が戻ってくるまでに、どこかでなにか見ていないとなにを言われるかわからないから、私はとりあえず、入り口から一番近い売り場をのぞくことにする。

そこは若い女の人向けのセレクトショップで、私の好みとは少しズレている。けれど、母はこういう服が好きで、私にも着せたがるから、ちょうどよかった。

店員の女の人もあまりやる気がなさそうだし、声をかけられるのが苦手な私にはちょうどよさそうだ。

どんな服をねだれば母は喜ぶだろう？ そう思いながら適当に店内を見てまわる。

白はすぐに汚れるから、きつとあまり喜ばない。でも、かといって黒を選ぶと、華やかさがたりないと眉をしかめられるだろう。やはりここは、淡いピンクのものでも見ておくべきだろうか。

「なにかいいの、あった？」

気づけば母が後ろに立っていた。私は曖昧に首を振る。

いいのなんて一個もないんだけど、どれがいいのか迷っている、そんなふうに見せなければならぬ。

母は私の仕草をいい具合に解釈してくれたらしく、自分でも服を物色しはじめる。こうなると長いけれど、私はただ後についていて、適当に返事をするだけだ。

「これなんかどう？」

そう言っただけで母が見せたのは、ちょっと派手な花模様のスカートだ。私は派手すぎると思ったけれど、母はこういう、華やかなものが好きで、いつも私にこういうものを着せようとする。

「丈はちょうどいいんじゃない？ ウエストがちょっと緩そうだけど」

「そうよねえ。もうちょっとサイズの小さいの、ないかしら……あ、こっちの色違いのだったらサイズがあるわね。どう？」

「そっちの色でも構わないけど」

「はつきりしないわねえ」

母は不服そうに言うと、スカートを私に押しつけて、別のところへ移っていく。

これは結局買うことに決まったんだと内心ため息をつきながら、私は母の後にしたがった。

結局、買い物は2時間半も続いた。普段歩きなれていない私は、すっかり足が痛くなってしまった。その上、買ったものでいっぱい袋を両手に持たされて、ああ、早く帰りたいな、などと考える。

でも食料品も買って行かないと母が言うから、私は荷物を持たまま、仕方なく母について行く。

そのときふと、ペットのエサのコーナーが目に入って、私はふと足を止めた。

そういえば、最近カブトムシは冬眠していたからエサを買う必要もなかったけれど、そろそろ買ってやらないといけない。

「ねえ、お母さん、カブトムシのエサ……」

私が声をかけると、母はいやそんな顔をしながら振り向く。

「そんなもの、いいじゃない。どうせ、まだ冬眠してるでしょ？」

「もう、動いてるよ」

「まだ大丈夫よ」

カブトムシの様子なんかろくに見てもいなくせにそう断言して、母は歩き出してしまふ。

私はこっそり、肩を落としてため息をついた。

母は虫が大嫌いなのだ。

逆に私は昔から虫が好きだった。カブトムシなんて、毎年、つがいで購入ってきては母にいやな顔をされているくらいだ。

カブトムシは冬を越させるのがなかなか難しく、まだ一度も成功したことがなかったのだけれど、今回は珍しく冬を越したようだったから、大事にしてやりたかったのに。きっとそんな私の気持ちなど、母には理解できないのだろうと思う。

母は昔から、そういう人だったから。

私が自分の思うとおりになっていないという状態が、耐えられないような人なのだ。

なにをするにしても、私のためだと口にしながら、自分のいいようにしてしまう。

私のためだと言うのなら、どうして、私の言っていることを聞くだけでもしてくれないのか、説明して欲しいとたまに思う。言えなし、言うつもりもないけれど。

母はきつと、気づかない。

私がどれだけ説明したとしても、理解などしてくれるわけがない。

母は理解したくないのだ。すべて私のためにやっているのだと信じていただけなのだ。

母は軽い足取りで、食品売り場を見てまわっている。私はただ、それについていく。いつまでも、どこまでも。

いったいいつまで、私はこうやって母の後をついて歩かなければ

ならないのだろうか？

家に帰りついた頃には、すっかり陽が落ちていた。

本日の戦果で着せ替えをしたがる母をなだめつつ、私はリビングを出る。

今日は一日中歩き通しで、もう、すっかり疲れているのだ。これ以上、母につきあう気力は私にはない。

とりあえず、2階にある部屋に戻ろうと階段を上がりかけ、私はふとカブトムシの水槽をのぞいて行こうと思いついた。

カブトムシの水槽は、玄関のすぐ脇、靴箱の横にひっそりと置いてある。

私は電気をつけ、ふたをはずして水槽をのぞきこんだ。

水槽には半分くらい腐葉土が入れてあって、独特のにおいがする。私はちよつと息を止めつつ、カブトムシの姿を探した。

けれども、なかなか見当たらない。ちゃんとふたはしてあるし、逃げられるはずはないのに。

また、土の中にもぐっているのだろうか？ そう思って、どこか掘ったようなあとはないかと探す。

そうして、ふと、カブトムシのお尻の部分が少しだけ、土の上のぞいているのに気がついた。

なんでこんな半端に埋まっているのだろうか？ 足も少しだけれども動いているから、また冬眠してしまったわけでもないだろうに…

…。

首を傾げつつ、私はカブトムシを指でつまんだ。

ひっぱってみると、なぜか、少し重い気がする。

不思議に思いつつもひっぱると、ちよつと抵抗があつて、カブトムシが出てきた。

「きゃっ……！」

けれど、私は思わず小さく悲鳴を上げて、カブトムシを落としてしまった。幸い、落ちたのは腐葉土の上だったから、カブトムシは

元気にもぞもぞと這っていく。

私はカブトムシに触れなかった方の手で、口許を押さえた。腐葉土の中には、なにか白いものが埋まっている。

ずんぐりむっくりとした、掃除機のホースのような白いもの
どうやら、つがいのカブトムシが知らない間に産みつけていた卵か
ら孵化したらしい、幼虫の姿が土の中に見えた。

ただ、普通の幼虫だったら、私もさすがに声を上げはしなかった
だろう、と思う。

その幼虫は、身体の一部が、茶色く変色して縮んでいた。

体液を、吸っていたんだ。エサがないから、土の中に埋まっていた
幼虫を探し出して。

そのことに気づいた瞬間、なんだか、今まで可愛がっていたカブ
トムシが、急に忌々しいものに思えた。

顔をそむけて涙をこらえる。

どうして、こんなことをするのだろう。

今年は、飼っていたカブトムシはつがいの2匹きりだったから、
他のカブトムシの幼虫ではありえないのに。

どうして、こんなことをするのだろう。

吐き気がした。

水槽にふたをして、よろよろと立ち上がる。

手を、洗おう。そう思うのに、なかなかうまく歩けない。

なぜだか母のことを思い出した。

いつか私も、あの幼虫と同じように、干からびていくに違いない。

《了》

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2839c/>

カブトムシ

2009年3月24日09時50分発行